

絵本 テキスト創作塾 通信 No.6

推敲の一方

文体その1・リアリティ

作品にリアリティを持たせることは、読者を惹きつける意味からも重要なことです。

絵本の発想は自由でよいし、読み手がアッと驚き、なるほどと思う展開は大事な要素でもあります。だから何を書こうが構わないのですが…。

編集中の例です。言うは簡単、実際に採り入れるのは相当に難しいのです。今回は、発生した例を挙げて、知ってもらおうようにします。

植物を主人公にした物

語の絵本。植物が歩いて旅に出ますが、それを見送る仲間の表情は、一つの顔をコピーして貼り付けてあり、リアルさがまったく感じられません。

絵本をどう描くのも構いませんが、貼り付け顔には表情がなく見るに堪えない絵になります。もっとリアリティがないと読み手に飽きられてしまいます。登場人物の表情を貼り付けるのではなく、一つ一つ作画して付けることで、そこにリアリティが生まれて、読み手に共感してもらえます。

表情のリアリティが分からないと言うので、目の形を変えればその絵が生き生きしてくると話しました。

何度かやり取りしている中で、見開き6枚目に画面一杯に描いた、大きな盛り付けの場面が出てきました。これは何かと聞くと、リアリティが大事という

から資料を参考にきっちり正確に書いた絵だと言います。

ストーリーには起承転結があり、この絵は転の山場のような絵に見えて、全体の流れからも不自然だと指摘したが、理解しただろうか。

このリアリティはどの分野であれ、少なくともその場面が大事という表現を見かけます。

次回からその実例を書くとしてします。

書評

たいようをつかまえろ

作：立川治樹

絵：くすはら順子

太陽をつかまえようと思いついたのは、うみがめのアオとアカが、あまりにも美しい夕日を見たせいです。最初のページは、海に沈む夕日の絵の美しさ、壮大さで始まります。

「沈んでいくたいような

がめてるだけやなくて、つかまえへんか？」

「たいようをつかまるやて？ そんなことできるんか？」

「しずんでいくとこわかってんやったらつかまえにいったらええやんか」と。

立川治樹さんの文章は全文、関西弁の口語体です。愉快的な物語を期待させます。

次のページは、夕日が沈むと海の世界が広がります。朱色と黄金色から深い青と水の色の世界にかわります。くすはら順子さんの絵の世界観は、太陽の日没は美しく、海の生物を可愛く力強く、壮大な自然と迫力を描き出しています。

「たいようをつかまえろ！」という壮大な計画は実現するのでしょうか。

アオとアカは、とうとう海底まで探しに来ます。ダイオウイカのダイちゃんの家があります。話を聞いて

て、大きなダイオウイカが太陽をつかまえようと探しますが、海底の暗黒の世界に太陽はいません。そこで、第2の計画、チョウチンアンコウが、100匹で明るく光を出してくれます。太陽はいません。太陽を探す仲間たちは、伝言ゲームで知らせます。

海の仲間が勢ぞろいし、物語はクライマックスへ。しかし、太陽はのぼっています。海面では、クジラ君が大ジャンプをしてみますが、太陽に届きません。物語のドラマチックな展開が絵の迫力で見事に表現されています。

この『たいようをつかまえろ』は、日本児童文芸家協会・絵本塾カレッジ共催「絵本テキストグランプリ」第一回大賞受賞作家の2作品目になります。

因みに第一回大賞受賞作品は『ちよとつ』です。文・芦名丹佐（司書）

作家の言葉

村上春樹：(作家)

僕は普段から、書きながら頭のなかで朗読してるようなところがあるんです。自分が書いた文章を、声には出さないけど頭のなかで読み直して、言いよどむところとか言いにくいところを書き直していくと、読みやすい文章ができる。

頭のなかで音にするっていうのがすごく大事なんです。だから、朗読というのは僕にとっては普段の行為とそんなに変わらない。

僕は40年以上小説家をやってるけど、複数の引き出しがないと行き詰まってくるんですよ。僕は、小説は長編、中編、短編を書くし、エッセーも書くし、翻訳をやるし、音楽の仕事もする。小説というメイン

のことだけはやめないんだけど、その時期その時期でまわりの引き出しの種類を変えながらやってます。

小説家は一人で仕事してるから、コロナはあまり関係ないんです。ただ、こういう状況でラジオをやって反応が戻ってくると、みんなやっぱり寂しいんだなという気がすごくしましたね。ラジオの声というのは、そういう寂しさに訴えかけるようなところがある。テレビの声とは違って、おおむね穏やかでおとなしいものなのです。だから僕もなるべくゆっくとわかりやすいように、平明な言葉で語りかけることを心がけています。

僕の場合は日々少しずつ進めていく仕事なので、来年こそはとか、そういうのはないです。ただ、ある程度年をとってきて、あといくつ長編書けるかなとかね、そういうことはやっ

ぱり考えます。

創作力、創作意欲というもんは、当然のことだけどだんだん衰えていくものなんです、誰だって。そういうのに抗して、いつまでも仕事ができるだろうなと、いうふうには考える。だからあまり急いでいろんなことをやるんじゃないかと、時間をかけてじっくりやりたいと思っています。

里中満智子

(マンガ家)

やなせさんは、何にでも本気の人。「子どもだから、こういう表現をしないとわからないだろう」という遠慮は一切なくて、作詞した「アンパンマンのマーチ」も、「なんのために生まれて/なにをして生きるのか」って、すごい歌詞ですよ。むしろ子どもが相手だからこそ、ちゃんとし

たことを伝えなきゃという思いはいつも感じました。

絵本が出た当時は「グロテスクだ」という批判もあったそうですが、やなせさんはめげずに描き続けた。飢えがどんなにつらいか、戦中に自身が痛感したからこそ、目の前で飢えている人がいたならば、食を分け与えりのは当たり前行為なんだと、信念を持っていらした。

アンパンマンは闘いもしますが、「分け与える」ことが主になっていると思います。思い出すのが東日本大震災の時。やなせさんはアンパンマンのポスターを「どこでどう使ってもいいから」と提供して、その後も積極的に復興支援に関わっていました。被災地で「アンパンマンのマーチ」が流れると、子どもたちがみんな歌うんですよ。大変な状況の中でも、みんなが助け合い、分かち

合う。

あの時、歌詞の意味を改めて考えさせられました。分かち合うことは、人と人とのつながりの基本。だからこそアンパンマンは、これからもずっと愛されていくと思います。

言葉の中から

山本周五郎・作家

この世で経験することは、なに一つむなしなものはない。

歓びも悲しみも、みんな我々に、よく生きることを教えてくれる。

亀井勝一郎・評論家

どんなに年をとっても、「第一歩」からやり直すといった気持ちを、常に失わないこと。

それが最上の知恵に、我々を導くであろう。

2023年10月14日

絵本テキスト創作塾事務局；発行